



「鬼」系の病因論：新出土資料を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大形, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006237

「鬼」系の病因論 — 新出土資料を中心として —

大形 徹

はじめに

鬼は祖先の靈魂をさす。卜辞においては鬼に起因する病が多く記されている。祖霊の不興をかい、また他の霊の恨みによって病が起こる。春秋時代にもそういった考え方は根強くある。『春秋左氏伝』にみえる有名な大厲^①は敵対する相手の祖先であり、殺された子孫の恨みをはらすため晋侯の夢に現われる。またその後の夢で病は童子の姿をとる。これは小兒鬼を連想させる。この童子が病膏肓の部位に入りこむ。入りこんだ童子（鬼）は退治できず晋侯は死亡する。ここに治療法として挙げられる薬は毒によって鬼を殺そうとするものである。また針は経絡の穴を刺すものではなく、直接、鬼を刺し殺そうとするもののようにみえる。

鬼を原因とする病因論は、「日書」や『五十二病方』などの新出土資料のなかにも色濃くみえる。けれども当時、一方では病に対する基本的な考え方を全く異にする気系の病因論が理論的整備をはじめている。そしてのちには鬼系の病因論もまたこの気系の病因論の影響を少なからず受けるようになる。本稿ではそのあたりに焦点をあてて論じたい。

一、「日書」の鬼

秦代の雲夢睡虎地秦簡「日書」^②（以下「日書」と略称）に鬼は数多くあらわれ、病を引きおこすものも多い。本章は工藤元男氏の研究^③その他に基づいて考察をくわえた。「日書」の世界は、人とそれに対する鬼神の世界である。たんに病のみにとどまらず、世の中のすべてのことは、人と鬼神の關係によって決定されている。

「日書」には鬼の名が具体的に記され、他の文献には未見のものも多い。

「甲乙に疾有るは、父母祟りを為す（「日書」甲種「病」七九七）以下「日書」を省略」・「丙丁（以下、干支は省略）に疾有るは、王父祟りを為す（甲種「病」七九九）・「王父殺さんと欲す（乙種其の二「有疾」）・「王母祟りを為す（甲種「病」八〇一）・「高王父姓（災）を謹す（一〇六三）」等。

「父母」は、亡くなった父母をさすのだろう。「王父」・「王母」は祖父母だが、これも亡くなった祖父母のことであろう。高王父はそれ以前の祖先のことであろう。ここはいずれも亡くなった祖先、つまり祖霊が祟りをなし、災いを引き起こすことを述べる。

『易』「晋」には「茲の介福を其の王母に受く」とあり、王母から介おほきな福を受けるといふ。王母という祖霊から福を受けるといふ意味

であろう。祖霊は子孫に福をさすけるが、祟りをなし疾病をおこすこともあるようだ。

「人故母くして鬼、其の宮を祠り、去る可からず。是れ祖口游べばなり。犬矢を以て之れに投ずれば来たらず（甲種「詰」八四七反）という。これも祖霊であろう。ふつう祭礼により祖霊を呼び出す。呼びもしないのにやってきた場合は追い払う。

「外鬼祟りを為す（甲種「病」八〇五）。「外」は「外王父」などと母や妻の關係に使われる。しかし「外鬼の父葉（世）（二〇五三）」などという表現もみえ、父葉（世）はふつう父方の伯父・叔父をさす。ここの「外鬼」は父母や王父母と対照的に使われており、直系の親族以外の鬼をさすのだろう。また「中鬼、社に現われて嘗を為す」という表現もあり、「中鬼（二〇五九）」もまた「外鬼」と対照的な語のように見える。さらに「人の妻妾若しくは朋友死し、其の鬼、之れに帰する者：（「詰」八四七反）」は妻妾や友人の幽霊である。これらは生前、關係の深かったものの鬼である。

「外鬼の殤死せしもの祟りを為す（甲種「病」八〇三）・「鬼、恆に羸（裸）にして人の宮に入る。是れ幼にして殤死して葬られざるものなり。灰を以て之れに漬けば則ち来たらず（甲種「詰」八四六反）」とある。殤は二十歳になるまでに死ぬことだが、ここは「幼にして」の語があり、小児鬼ではないかと思われる。「夭鬼（甲種「詰」八六四反）」の「夭」も「殤」に通じると思われる。ほかに「鬼の嬰兒、恆に人号を為して曰く、『我に食を鼠（予）えよ』と。是れ哀乳の鬼なり。其の骨、外に在る物有らば、黄土を以て之れに漬けば則ち已む（甲種「詰」八六七反）」は「哀乳の鬼」とされるが、これもまた小児鬼であろう。「骨」に黄土をふきかけて退治するという。

小児鬼（魃）は赤ん坊が死亡して鬼となったものだが、魃病を病むのは赤ん坊が多い。

「人、子を生み、未だ行く能わずして死し、恆に然り。是れ不辜鬼、之れに処ればなり（甲種「詰」八四四反）。また「人恆に赤子を亡うは、是れ水に亡傷（殤）す。之れを取るは乃ち灰室を為りて之れを牢し、縣（懸）くるに菴を以てすれば則ち得らる。之れを刊るに菴を以てすれば則ち死す。亨（烹）て之れを食らわば害せず。（甲種「詰」八三一反）」とある。ここでは「灰」をもちいて鬼をとらえる。そのあと鬼を食べてしまうのは「十二獸神が鬼を引き裂いて食べてしまうぞ」と脅す「籩」の呪文に似る。

「鬼恆に人に召（詔）げて曰く、『壘（爾）は必ず某（某）月日を以て死す』。是れ持鬼（饒氏は持）、偽りて鼠と為り、人の醜・鬻・滌・將（漿）中に入る。求めて之れを去れば、則ち已む（甲種「詰」八七一反）。これはいわゆる死神であるが、鼠の姿にばけているという。鼠になるとするのは、本来、鬼は靈魂であり、気状のものであるため、鼠の体内に入り込み、その肉体を借りるということではないかと思われる。

「一宅の中、故母くして室人皆な疫し、或いは死し或いは病む。是れ是れ刺鬼（饒氏は棘鬼）、焉に在ればなり。正立して狸もる（八五九反）・「人故母くして鬼之れを攻めて已まず。是れ是れ刺鬼なり八六九反」・「人故母くして一室の人皆な疫し、或いは死し或いは病む。丈夫・女子、須（鬢）を隋（墮）し、髪を羸し、黄目たり。是れ是れ案人、生れて鬼と為る（八五三反）。ここでは疫病で病んだり、死んだりする。その原因として刺鬼などの名が記されている。興味ぶかいのは「故母くして」の表現である。これは随所にみえる。この表

現は先にみた王父などの「祟り」と比較できる。「祟り」の場合は、祟る理由があるが、「故母くして」の場合は文字どおり、その理由がないのである。

「一室の人、皆な體（體）を養（養）しとす。癩鬼、之れに居る。生桐を其の室中に燻けば則ち已む（甲種「詰」八四四反）。「癩鬼」という名からは悪質な症状を想像させるが、体が痒くなるという。桐を室内で焼き、その煙によって鬼を追い払う。なお桐人は殉葬に用い、また棺材にも用いられた。これは桐木に遺体をあらず鬼をしりぞける力があると考えられたからであろう。

「鬼恆に夜に人門を鼓し、以て歌うこと哭するが若し。人之れを見る。是れ兇鬼なり…（甲種「詰」八六七反）。「論衡」によれば死に近い人が鬼を見る。自身も鬼に近づいているから鬼が見えるのだから。ここで「人之れを見る」とあえていうのは、鬼はふつう見えないとされるからだろう。

「鬼、恆に人に悪曹（夢）を為す。覚めて占う弗し。是れ圖夫なり（甲種「詰」八五二反）。夢に鬼があらわれることは多いが、ここは鬼が人に悪夢を見させる。

これまで考察した以外に、つぎのような鬼がみえる。「凡そ邦中の立叢、其の鬼恆に夜、誹ぶ。是れ遽鬼の人を執らえんとするなり（甲種「詰」八二九反）。「人故母くして室皆な傷う。是れ祭逆の鬼、之れに処ればなり（甲種「詰」八三九反）。「人故母くして鬼其の宮を昔（藉）む。是れ是れ丘鬼なり（八六七反）。「故丘の鬼、恆に人を畏れしむ（甲種「詰」八七二反）。「人故母くして鬼之れを惑わす。是れ條鬼なり（八六四反）。「人故母くして鬼取りて膠を為す。是れ是れ哀鬼なり。人と徒を為し、人の色をして白然として気母からしむ

（八六二反）。「暴（暴）鬼（甲種「詰」八五九反）（「暴鬼」は甲種「詰」五六にもある）。「餓鬼（八三四反）。「室鬼拘らえんと欲す（一〇七一）。「游鬼（甲種「詰」八四五反）」などがある。

鬼以外のものとして、「大祿（魅）（八六九反）」がある。祿は、『山海經』海内北經に「祿、其の物為るや人身黒首従目」とあり、郭璞の注では「祿は即ち魅なり」と「魅」だとされる。「魅」は「彪」で、『説文』「彪」では「老物の精なり」という。年をへた物が怪異をなすのであろう。ここでは「精」とされるが、『史記』「五帝本紀」「魑魅」につけられた「集解」にひく服虔の説は「山林の異氣の生ずる所」と「氣」として解釈されている。

また「是れ神狗偽りて鬼と為る（八四八反）。「狼、恆に人門に誹びて曰く…（甲種「詰」八六三反）。「女鼠（甲種「詰」八五一反）。「幼蠶・大神（人を害す）（甲種「詰」八四六反）」などもみえる。狗や狼・鼠・龍などの動物もまた害を与える。狗は神狗であり、たんなる狗ではない。「大神（八六九反）」という神もみえる。

神に関しては他に、つぎのようなものがある。「鬼恆に人に胃（謂）う。『我に而の女を鼠えよ』と。辞する可からず。是れ上神下りて妻を取るなり。輟（繫）るに葦を以てすれば、則ち死す（甲種「詰」八五七反）。この「上神」は甲種「詰」八六五反にもみえる。「上神」は「礼記」礼運篇に「其の祝嘏（福の意味）を修め、以て上神と先祖を下らす」とある。その疏には「上神とは上に在るの精魂の神、即ち先祖なり。其の精氣を指し、之れを上神と謂う。其の亡親を指し、之れを先祖と謂う。協句にして之れを言い、分ちて二と為すのみ」とあり、上神も先祖も同じものだという。天に在る祖霊をさすのであろう。『礼記』は降神の儀式のことをのべている。「日書」の「上神」

という鬼も祖霊をさすのだから。「降神」の儀式とは無関係に、やってきて、「女をあたえよ」と難題をいう。さきには祖口という祖霊に犬の糞をなげて追い払ったが、ここでは葦縄で縛れば死ぬ、と述べられる。

「鬼仮に人の女に従いて、与に居る。曰く、『上帝の子、下游す』と。去らしめんと欲すれば、自ら浴びるに犬の矢を以てし、繫ぐに葦を以てすれば、則ち死す（甲種「詰」八五八反）」もほぼ同様の内容が記される。上帝は天帝だが、その子が下游すという。ここは上帝の子がよりつかないように自らの身体に犬の糞を浴びる。

「状神（甲種「詰」八六〇反）」・「神虫（甲種「詰」八六二反）」も「神」と関わるようである。

「野獸若しくは六畜、人に逢いて言う。是れ飄風の気なり。撃つに桃丈（杖）を以てし、屨（履）を釋（釋）ぎて、之れに投ずれば則ち已む」・「凡そ大栗（飄）風有りて人を害す。釋（釋）ぎて、之れに投ずれば則ち止む（八三二反）」など。ここには「飄風の気」という「気」がみえる。「気」ではあるが、その対処の方法は鬼に対するものと同様である。風は他に「寒風、入室に入る（八三八反）」がある。

「竈、故母くして以て食を熟す可からず。陽鬼、其の気を取ればなり。豕の矢を室中に播けば則ち止む（八四二反）」ここでは「陽鬼」という陰陽に関係する鬼がみえる。これが竈の気を取ったため、竈で食べ物が煮えないという。竈は火であり、陽であるので、竈の気は陽の気となるのであろう。「陽鬼」とはその陽の気を食らう鬼のようである。豕の矢を焼いて煙を出し、その悪臭によって鬼を追い払うのであろう。「女子狂癡せざるに、歌いて以て商を生すは、是れ陽鬼の業、之れに従えばなり（甲種「詰」八四九反）」にも陽鬼はみえる。

「人の六畜、故母くして皆な死す。飲鬼の気入ればなり（八四〇反）」ここでは鬼は気となり、六畜のなかに入りこみ、死亡させる。「日書」において、すでに鬼と気は結びつけられている。鬼はふつう目に見えず、体内に入りこんだりする。鬼が気であれば、それは合理的に説明できるのである。

一般に、鬼神は、子孫に福をもたらし、また災厄をもたらす。けれども「日書」にみえる鬼は、もっぱら災厄をもたらす存在として語られる。同時にその撃退法も記されている。その方法としては、桃や桐といった鬼の撃退に有効とされた木を使い、弓・矢・剣といった武器で追い払う。これらは実用の武器ではない場合が多い。また葦縄でしばる。包んで埋める。鬼（靈魂）のよりついた枯骨を移動させる。灰をまく、煙でいぶす、などがある。

「日書」では鬼の撃退に薬物よりも呪具を使うことが多い。鬼がまだ体内に入りこんでいないことが多いからだろう。また「日書」は干支と深くかかわるので、五行との結びつきが強いと思われるが、鬼自体は五行とむすびつけられているようにみえない。

二、『五十二病方』の鬼

漢代初期のものときれる『五十二病方』（以下『病方』と略称）もまた「日書」と同様の世界観のもとにある。ただし「病方」という書物の性格上、鬼は病を起こす原因として現われてくる。この場合、病の治療とは、患部に対する適切な処置ではなく、鬼を追い払い薬殺することである。その際、呪文が併用される。呪文の原理は強力な神を呼びだし、あるいは自らが神になりかわり、悪鬼を追い払うというも

のである。

傷つくる者の血出づ。祝して曰く、「男子は竭くせ。女子は載て」と。五たび地に画して之れを□せよ。(諸傷)
ここでは出血の際に呪文をとなえる。そのあと豚の膏からつくった軟膏の類を塗る。

諸傷。風、傷に入る。癰を傷つけ痛む。…以て寒気を欧(驅?)る。(諸傷)

ここでは「風」・「寒気」という表現がみえる。これは『傷寒論』「傷寒例」の「…此を以て冬、寒に傷つき」や「凡そ傷寒の病、多く風寒に從りて之れを得」を想起させる。また寒気の語は『黄帝内经』にも多くみえる。

「風」・「寒気」は確かに「氣」として理解されている。しかし「寒気を欧る」という表現は、むしろ「鬼」を追い払う表現である。ここでは「氣」もまた「鬼」的なものとして理解されているようにみえる。

頰(鼠蹊ヘルニア)。柏の杵を操り、禹歩すること三たび。曰く、「賁く者、一たび胡(たれさがったヘルニアの肉)を裏かん。漬く者二たび胡を裏かん。漬く者三たび胡を裏かん。柏の杵は臼のごとく穿たん。一母に□(子?)なるに、□(若?)独り三(二つの擧丸に落ち込んだ腸をあわせた数?)有り。賁く者、若を種(撞?)かん。柏の杵を以て七たびし、某の積をして一母からしめん」と。必ず同族をして積者を抱かしめ、東郷(東向き)の窗の道の外に直り、改して之れを椎く。(腸類)

改は、『説文』に「殺改。大剛卯。以て鬼魘(魘)を逐う」とある。「大剛卯」は漢、史游『急就篇』十五章「魘を射ち邪を辟け群凶を除

く」の顔師古の注にみえる。

魘は小兒鬼なり。魘を射つとは、能く射ちて魘鬼を去らしむるを言う。…一に曰く魘を射つとは、大剛卯を謂うなり。金玉を以て乃ち桃木に刻して之を為る。一名殺改。其の上に銘有りて旁に孔を穿つ。糸くるに綵糸を以てし、用て肘に係く。亦た精魘を逐う所以なり。

とあり、桃の木に彫刻したものである。桃は鬼を追い払うために多用される。

『病方』の此の箇所は儼の儀式と類似した方法により病の原因の鬼を追い払っている。

「瘥」にも呪文のあとに「鉄椎を以て之れを改段すること二七」とあり、実際に鉄槌で十四回叩く、と記されている。

魘自体も『病方』にあらわれる。

魘 禹歩すること三たび。桃の東楫を取り、中ほどに別かちて□□の倡と為し、門戸の上に笄すこと各おの一。

一。祝して曰く、漬する者は魘の父、魘の母なり。□□を匿すこと勿かれ。北□巫婦、若を求め固く得ん。若の四體を□し、若の十指を編み、若を□水に投ぜん。人なり人なり。而して鬼に比す。毎に□を行い、采れた蠱を以て車と為し、敝箕を以て輿と為す。人の黒猪に乗り、人の室家に行かむ。□□□□□□□□□□若□□距(肘)を徹す。魘の□(父?)、魘の□(母?)、□□□□所。(魘)

「若を□水に投ぜん」は『後漢書』「礼儀志」で鬼を洛水に追い払うことと似ている。

魘は小兒鬼とされるが、その魘のおそれるものは、魘の父母だとい

う。魃は魃を生み出した者を恐れるということになる。

難の儀式では、鬼を追い払うのは方相氏（ほうさうし）と呼ばれる神であったが、『病方』では呪文のなかに天帝が登場する。

繫。唾して曰く、歎。黍。三たびす。即ち曰く、「天畜（帝）、若を下すは、弓矢に黍ぬるを以てす。今、若は下民に疴（かぶれ）て薄い膜のできるもの。ここはうるしまけをたとえる」を為す。若に塗るに豕の矢を以てせん。履の下を以て之れを靡（ふ）き抵（た）たん」と。（繫）

このあとすぐに一方として、

祝して曰く、「畜（帝）に五兵右（有）り。玺（爾）亡（亡）げよ。亡（亡）げざれば、刀に瀉（ま）ぎて装いを為さん」と。即ち之れに唾すること、男子は七。女子は二七。（繫）

とある。漆を人間界に下したものは天帝である。しかし漆が人の役にたたず、かぶれをおこしたりすると、それを追い払おうとする。次の箇所では漆は「漆王」と呼ばれているが、豚の糞などの汚いものを塗ると脅したり、靴底でふみつけると脅す。さらには天帝の武器で切り殺すぞ、という。

また「腸類」では天神・神女がみえる。「□爛者」・「久疴」には黄神がみえる。これは「黄神在竈中」とカマドの神である。

蟲に□る者、扁幅（編蝠）を燭（じゆく）くに荆（けい）の薪を以てし、即ち以て邪者に食らわす。（蟲）

馬継興は『漢書』元帝紀につけられた顔師古の注「邪は生氣に非ざるを言うなり」を引用し、「不正の氣」と解釈する。しかしここを「正氣」に対する「邪氣」と「氣」の観点でとらえてよいかは疑問である。

『病方』はほとんどが呪文と薬物療法であるが砒石や「灸」による治療もみえる。

積。先ず卵（畢丸）を上げ、その皮を引き下す。砒を以て其の〔隋（た）れし〕旁（た）を穿つ。□汗及び膏□を□（？）け、撓（た）（澆）ぐに醇（酒）を以てす。有（た）た其の瘡（瘡）に久（灸）し、風をして及（た）びしむる勿（た）ければ、瘳（た）え易し。而して其の泰（太）陰・泰（太）陽に久（灸）す。（灸）す。（腸類）

ここには砒石や「灸」による治療がみえ、また泰（太）陰（脈）・泰（太）陽（脈）の語もみえる。『馬王堆古医書考釈』四九三頁によれば、太陽や太陰脈の名はみえるが穴名はなく、また『足臂十一脈灸経』・『陰陽十一脈灸経』等には、太陽脈や太陰脈によって癩疔の治療をすることはない、という。

『病方』「腸類」には、やはり癩疔の治療に中顛すなわち頭のとてべんに灸をすえることをいう。灸は疽の治療にもある。ただし灸の治療法としてみれば経絡を熟知しているようにはみえない。

また『病方』「腸類」には病の快癒を感謝し、豚を供えることを記す。赤堀昭氏は、この神を司命神と推測している。

三、『神農本草経』の鬼

『神農本草経』の鬼については、かつて考察を加えたことがあるため、ここでは簡単に論じたい。この書には、つぎのような鬼があらわれる。鬼(12)・鬼物(2)・殃鬼(1)・注鬼(1)・温鬼(1)・百鬼(1)・邪惡鬼(1)・注惡鬼(1)・「()内はあらわれる回数」。「日書」と比べると鬼の種類はそれほど多くない。「日書」では「○○はA鬼なり」

と、鬼の名を特定することが多かった。これは鬼の正体を知り、それを撃退するという意味があったようだ。『神農本草経』にはその意識はあまりみえない。

鬼を退治する言い方としては、治(24)・殺(19)・除(3)・辟(2)・去(2)・見(2)がみえる。このうち殺が多いことに注目される。「鬼を殺す」・「邪鬼を除く」・「鬼・精物を殺す」・「精物・悪鬼を殺す」・「精魅・邪悪の鬼を殺す」・「百精・老物・殃鬼を殺す」・「精物・悪鬼・邪気・百虫・毒腫を殺す」などと記されている。鬼は本来、死者の靈魂であるので、鬼を殺すというのは論理的に矛盾する。しかし、「日書」にも鬼を殺すことがみえ、讎の呪文の内容も鬼を殺すことにつながる。感覚的には十分了解できる表現である。

鬼のおこす病としては、鬼注(22)・鬼毒(4)・鬼蠱(1)・鬼瘧(1)・鬼温瘧(1)・鬼氣(1)・鬼撃(1)などがみえる(一)内はあらわれる回数)。こういった病名はもちろん『黄帝内経』にはみえない。しかし『諸病源侯論』にはあらわれている。本草書にみえるこういった鬼系の病名はやはり無視できないものであったのだろう。

また『神農本草経』には「鬼」だけでなく「鬼氣(卷下、石長生)」という語もみえる。また「邪氣」も多出する。『黄帝内経』の邪氣は正氣や精氣に対するものであったが、『神農本草経』では正氣や精氣という言い方はみえない。なお邪氣は『礼記』楽記、『莊子』刻意、『管子』形勢解、『淮南子』、『史記』扁鵲倉公列伝などにもみえる。

四、『傷寒論』の鬼

『傷寒論』には「脈」あるいは「太陽病」といった表現が随所にみえ、氣系列の病因論をとっている。基本的には『黄帝内経』に似ている。ただし『黄帝内経』は鍼石による治療を主とするが、『傷寒論』は方剤による治療が主である。『黄帝内経』には「邪」および「邪氣」の語が頻出するが『傷寒論』ではそれほど多くあらわれない。また「邪氣」に対する「正氣」あるいは「精氣」といった表現も見えない。これは薬物による治療が主であるからだろう。薬物治療は原理的に「氣」と結びつきがたいように思われる。

『傷寒論』には「鬼」も数例あらわれる。婦人傷寒、熱を発す：暮に則ち譫語し、鬼の状を見る者の如し、此れ熱の血室に入るが為なり。胃氣及び上二焦を犯す無ければ、必ず自ら愈ゆ。(辨太陽病脈症并治下)

ここは発熱し、うわごとをいい、鬼を見たようになるという。同様の例は「潮熱を発し、：独語し、鬼の状を見るが如し(辨陽明病脈症并治)・(辨発汗吐下後病脈症并治)・：熱を発し、狂走して鬼を見る(辨不可下病脈症并治)」と、いくつかある。熱にうかされ、精神が異常になる状況をさす。

「鬼を見る」という表現は、鬼の存在を肯定しているようにみえるが、鬼が体内に入りこんで病を引き起こすのではない。

また赤く腫れて芯のある「できもの」に灸をすえるという療法を記す。

：其の核上に灸すること各おの二壯、桂枝加桂湯を与え、更に桂二両を加うるなり。

これは『病方』の記述と比較してみると興味深い。

身に癰有る者は、自ら大山陵（癰をたとえる）を擧て取る。某は幸らわれて癰を病む。我れ百疾の□に直たる。我れ明月を以て若を炳らさん。寒□□□柞槍（槍？）を以てせん。若を程（枉？）ぐるに虎蚤（爪？）を以てせん。若の刀を抉り取り。若の葦（葦？）を割き、若の肉を剔たん。□若去らざれば、苦しまん。唾（唾？）□□□□。朝日未だ□、□郷（向？）して之れに唾（唾？）せん。

ここには呪文が記されている。「若」とよばれるものは「癰」である。「癰」は体内に悪鬼が入りこんで生じるのであろう。追いだすためには悪鬼をおどしつける呪文が必要で、実際の治療はそのあとに行なわれる。ここでは薬物を塗布し、「之れを炙る」と、火による療法が行なわれている。「できもの」を火で焼くという治療法は『傷寒論』・『病方』に共通する。しかしその背後にある病に対する考え方は全く異なる。

また『傷寒論』「辨陰陽易差後勞復病脈症并治」には「陰易」の治療に「焼禪散」をもちいるという。これはそのあとすぐに「婦人の中禪、隠処に近し。焼きて灰と作すを取る」と説明される。これは女性の下着である。

これも『病方』の「熱」の治療の女子の布を漬け、汁を以て之れを傳く」を想起させる。「女子の布」は下着と解され、ここにも呪文が使用されている。『病方』ではほかに「女子の布」が「瘡（ヘルニア）」の治療にみえ、さらに「女子の月事布（女子の月経の血のついた布）」を「類（脱腸）」の治療に用いたり、「女子の未だ嘗て丈夫あらざる者の□（布？）」を蟲の治療に用いたりしている。それらを用いる理

由は示されていない。

『傷寒論』の「婦人の中禪」もまた「女子の布」の流れにある治療法であろう。しかし『傷寒論』では「婦人は男子の禪を取りて焼きて服す」と述べられ、婦人には男子のものをを用いる。つまり男子には女子のもの、女子には男子のものをを用いる。これは本来は呪術的であったものを「陰陽」の考え方でとらえなおしたものであろう。

五、『諸病源候論』の鬼

隋、巢元方等編『諸病源候論』は大業六年（六一〇年）につくられた書物である。この書は各種の疾病の原因を六十七門、千七百三十九候に分けて論述する。また養生・導引などもあわせて説かれている。基本的には、気および経絡の考え方にもとづく書物である。

ところが「鬼」に関するものも決して少なくはない。以下、具体例をあげていく。

「鬼邪候47」は鬼を病因とみる。

凡そ邪氣・鬼物の為す所の病なり。其の状、同じからず。或いは言語錯謬し、或いは啼哭驚走し、或いは癡狂昏乱し、或いは喜怒悲笑し、或いは大いに怖懼し人の来たりて逐うが如し、或いは歌謡詠嘯し、或いは肯えて語らず。

症状には精神の異常が伺われる。ここでは邪氣と鬼物が同格にあつかわれている。

針を持ち髪中に置き、病者の門に入り、埤岸の水を取り、三尺の新布を以て之れを覆い、刀を膝上に横たえ、病者を前に呼び、衿莊して病者の語言・顔色を觀視す。応対精明ならざれば、乃ち以

て水を含み之れに嘔す。病者をして起たしむる勿く、復た頭を低くして視る。三嘔に満つるの後ち之れを熟拭す。若し病、困劣憊冥ならば、強いて起たしむる無く、就きて之れを視る。昏冥にして遂に人を知らず、敢えて語らざれば、指を以て其の額の髪に近きの際を弾きて曰く、「愈えんと欲するか？」と。猶お肯えて語らざれば、便ち之れを弾くこと二七にして曰く、「愈えよ。愈ゆれば即ち鬼に就き受くるに情実を以てせん」と。

針や刀は鬼に対する武器であろう。ここでは薬は用いず、埤岸の水と呪文を用いる。

このあとに付された養生方は、『上清真人訣』を引用してこういう。夜行して常に歯を琢せば鬼邪を殺す。

琢歯は上下の歯をカチカチと噛みあわせることで道教関係の文献に多出する。

このあとに引かれるものは、牛馬によって鬼を避けようとするものである。

又た云う、封君達、常に青牛に乗る。魯女生、常に駁牛に乗る。孟子綽、常に駁馬に乗る。尹公度、常に青驪に乗る。時人其の名字、誰と為すやを知る莫し。故に曰く「不死を得んと欲すれば、当に青牛道士に問うべし。此の色を得んと欲すれば、駁牛上と為し、青牛之れに次ぎ、駁馬又た之れに次ぐ。三色なる者は、生に順うの気なり」と。故に云う、青牛は乃ち栢木の精、駁牛は古の神祕の先、駁馬なる者は、乃ち神龍の祖なりと。云う、道士之れに乗りて以て道を行かば、百物の悪精、疫気の癘鬼、長く之れを齧ると。

封君達や魯女生は『後漢書』方術伝や『漢武帝外伝』などにも登場

する仙人で封君達は青牛道士として知られる。青牛は『述異記』に「千年の木の精、青牛と為る」とされるが、ここでは「栢木の精」だという。栢すなわち栢は墓に植えることが多いが、それは死体をあらす鬼である罔両がおそれるからだという。またやはり死人の脳を食う弗述を栢の枝で刺し殺すことができるという。神祕は『周礼』「春官」「大宗伯」にみえる「天神・人鬼・地祇」の地祇にあたるのだろう。これは地祇で地の神をいう。

ここはたんなる牛馬ではなく、じつは「栢木の精」・「神祕の先」・「神龍の祖」であって、その威力で鬼をおい払うのであろう。

ここでは「疫気の癘鬼」と「氣」を「鬼」で表わす。ここには『黄帝内经』のように鬼と氣を峻別しようという意識はない。

中惡候

中惡は、是れ人の精神衰弱し、鬼神の氣の為に卒かに之れに中なり。夫れ人は陰陽、理に順い、榮衛、平に調わば、神守りて則ち強く、邪、正を干さず。若し將に摂りて宜しきを失わんとすれば、精神衰弱し、便ち鬼毒の氣に中る。其の状、卒然として心腹刺痛し、悶乱し、死せんと欲す。

中惡は心臓や腹部に突然、劇痛が走る病である。それを鬼撃と表現する。ここでは「鬼神の氣」・「鬼毒の氣」と鬼を氣としてあらわす。その氣が体内に入り込むと考えたのであろう。また「邪、正を干さず」とあるが、これは邪氣・正氣と考えられ、鬼神の氣はやはり邪氣とされているのだろう。

中惡死候

鬼邪の氣に中れば、卒然として心腹絞痛し悶絶す。此れ是れ客邪暴かに盛んにして、陰陽の氣、之れが為に離絶し、上下通せず…。

ここでは「邪氣の氣」と呼ばれ、それが「陰陽の氣」に影響するとされる。

卒忤候

卒忤とは亦た客忤に名づく。邪氣の氣、卒かに人の精神を犯忤するを謂うなり。此れ是れ鬼厲の毒氣、中惡の類なり。人、魂魄衰弱する者有らば、則ち鬼氣の犯忤する所と為る…。

「鬼厲の毒氣」は、精神や衰弱した魂魄などに影響をあたえるといふ。

「鬼擊候」にも「鬼厲の氣」とみえる。そのあと「鬼擊」の一名「鬼排」を説明して次のようにいふ。

一名、鬼排と為す。云うところは鬼排して人に触るるなり。人、氣血虚弱、精神衰微するもの有れば、忽ち鬼神と遇い、相い触突し、其の排擊する所を為すを致す…。

これも鬼神であるが「氣血虚弱、精神衰微」につけこまれるという。ほかに「鬼神の氣(卒死候)」、「客邪鬼氣(卒忤死候)」といった言い方がみえる。

「卒魔候」

卒魔とは屈なり。夢裏に鬼邪の魔屈する所と為るを謂う。人臥して悟めざるは、皆な是れ魂魄外遊し、他邪の執らえ録する所と為り、還らんと欲して未だ得ざるは、魔を成すを致すなり。火照らすを忌む。火照らさば則ち神魂遂に復た入らず、乃ち死に至る。

ここは夢のことをいう。古代より夢中に魂が抜けでるとされた。魔とはその魂が邪鬼によって捕らえられ、自分の身体に戻れなくなったことをいう。悪夢にうなされたたり、金縛りとなることをそう解釈したのである。

このあと「養生方導引法」をひき、その予防の方法を記す。

魂門を拘し、魄戸を制す。名づけて握固の法と曰う。大母指を屈し、四小指を内に著け之を抱く。積習して止まざれば、眠りし時も亦た復た開かず、人をして魔魅ならざらしむ。

この導引法は指を固く握る。それによって魂門や魄戸を閉ざすた魂魄が外遊しないのである。漢初の導引は氣の循環を説き、鬼および魂魄とは無縁であった。ここでそれらが結びつけられているのは興味ぶかい。

魔不寤候

人、睡眠すれば、則ち魂魄外遊し、鬼邪の魔屈する所と為る。其の精神弱き者、魔すれば則ち久しく寤むるを得ず。乃ち氣暴かに絶するに至る。所以に傍人の助け喚ぶを須ち、并せて方術を以て之れを治むれば、乃ち蘇る。

ここでも睡眠中に魂魄が抜け出てそれが鬼邪にとらえられる。精神の弱い者は目覚めず、そのまま死亡してしまうという。目覚めさせるには傍らの人が叫ぶ。「卒魔候」には、「闇に喚ぶ」、「遠くに喚ぶ」といった方法を記す。これは魂が闇の中や遠くに出遊していると考えられたからであろう。

諸戸候

人の身内に自ら三戸諸虫有り。人と俱に生く。而して此の虫、惡を忌み、能く鬼靈と相通じ、常に外邪を接引し、人の患害を為す…。

ここは三戸虫をいう。三戸は鬼靈と通じ、常に外邪を接引する。これは鬼靈の命令によるのであろう。

尸注候

尸注病は、則ち是れ五戸内の尸注にして、外の鬼邪の氣を挾び、

身体に流注し、人をして寒熱淋瀝せしむ…。

先と同様のことを述べるが、「尸注」という病名のためか、「鬼邪の氣」を身体に流注する、という表現となっている。

鬼注候

注の言や住なり。其の連滞し停住するを言うなり。人、先に他病無きに、忽ち鬼の排撃を被る有り。時に当たり或いは心腹刺痛し、或いは悶絶し地に倒るること、中惡の類の如し。其の差ゆるを得るの後ち、餘氣歇きず。停住し積むこと久しく、時に発動し、連滞し停住し、乃ち死に至る。死後、傍人に注易す。故に之れを鬼注と謂う。

「鬼注」と「鬼」がつくが、「餘氣歇きず」と、やはり「氣」によって説明される。「注」は身体の中に「停住」することと傍人に「注易」することの両面から説明される。

邪注候

注とは住なり。其の病、連滞し停住し、死して又た傍人に注易するを言うなり。凡そ邪と云うは、不正の氣なり。謂えらく人の腑臟血氣は正氣為り。其れ風寒暑熱、魅魘魘、皆な邪を為すを謂うなり。邪注とは人体虚弱に由り、邪氣の傷つくる所と為り、經絡に貫注し、腑臟に留滞し、人の神志をして定まらざらしめ、或いは悲しく或いは恐ろし。故に之れを邪注と謂う。

病因を「正氣」と不正の氣である「邪氣」でとらえる。これは『黄帝内經』と同様である。しかし風寒暑熱だけを「邪」とせず、魅魘魘といった鬼をも、その中に含めている。またここは魘魘魘ではなく魅魘魘である。魘は小兒鬼である。魘魘魘は山川の精怪であるが、病をひきおこすのは魘が多い。

ほかに「毒注候」に「毒とは鬼毒の氣」、「注忤候」に「鬼邪の毒氣」とみえる。また「蠱毒病諸候」には「猫鬼候」を記す。

猫鬼とは、是れ老狸野物の精、変じて鬼域と為り、人に依附す。人畜いて之れに事うるごと、猶お蠱に事うるが如し。毒を以て人を害す。其の病状、心腹刺痛し、人の腑臟を食らい、血を吐き利血して死す。

ここでは人鬼ではなく猫鬼つまり老狸野物の精である。症状は蠱毒に似るといだが、それを一種の鬼の仕業と考えたのであろう。

「小兒雜病諸候」では小兒の病を集める。

為鬼所持候

小兒、神氣軟弱、精爽微羸、而して鬼の持録する所となる…。

小兒の神氣が軟弱で、精爽すなわち精神・魂魄のたぐいも微かみづかで羸よわいとき、その魂魄は鬼につかまえられてしまふ。大人の場合は夢や睡眠中のこととされるが、ここではそういったことは記されない。

ほかに「鬼神の氣(卒死候)」・「鬼邪の氣(中惡候)」・「風邪鬼氣(注候)」などの表現がみえる。

被魘候

小兒に魘病有る所以は、婦人懷娠し、惡神、其の腹中の胎に導かるる有りて、妬嫉して他の小兒を制伏し病ましむるなり。任娠婦人、必ずしも悉く能く鬼に制せられず。人、時に此れ有るのみ。

魘みだの疾を為すや、喜おほく微みづかかに下くだ(下痢)し、寒熱去来し、毫毛拳みだ擊つれ、悦こあらず。是れ其の證なり。

魘病だが、魘は惡神とよばれ、小兒鬼とはされていない。けれども他の小兒に嫉妬するところをみれば、この惡神も小兒鬼ではないかと思われる。

以上、『諸病源候論』にみえる鬼は次のようにまとめることができ
る。○『諸病源候論』は『黄帝内経』のように鬼系の病因論を否定し
ない。その多くは精神にかかわるものとしてとらえる。○「疫気の癘
鬼」と気によって鬼が説明され、また「鬼神の気」・「鬼毒の気」・
「鬼邪の気」・「鬼邪の毒気」・「客邪鬼気」・「風邪鬼気」と鬼によっ
て気が説明される。鬼は本来、魂魄と同質のものであり、鬼自体が気
であると認識されていたのだろう。ゆえに「鬼」を一旦、「気」に置
き換えることによって、気系の病因論のなかに組みこむことができた
と考えられる。○鬼の種類は「日書」や『神農本草経』のように多く
ない。これは鬼の名前を知ることによって鬼を追い払うといった考え
方が希薄であるからだろう。○魂魄の離脱と病を関連づける。魂魄が
弱っている。あるいは小児のため弱い、といったことにより、鬼に魂
魄を捕らえられるという。

おわりに

病をおこす悪鬼とそれを追い払う善神という考え方と、気の循環を
基本とする考え方とは原理が全く異なる。後者は陰陽・五行という当
時、新しく考え出された思考法を借りてしだいにその理論を構築して
いった。気系の病因論は当時において斬新で合理的なものであり、迷
信にみちたようにみえる悪鬼・善神の鬼系の病因論に訣別を告げたは
ずであった。

しかし、気系の病因論も、体内の古い気が病気を引きおこすとい
う導引系の理論だけにとどまらず、外部から邪気が侵入するという理
論と組みあわされていく。この「外邪」という考えは、ふるくより

「風」とよばれていたものであった。「風」は鬼系の病因論の色濃い
「病方」にも「風、傷に入る」としてみえる。ここでは「寒気を散る」
と、「気」ではあっても鬼を追いはらうのと同様の方法が記されてい
る。

「日書」では鬼の姿が説かれ、鬼を見ることが語られる。しかし、
鬼系の病因論のなかでは、鬼の正体を暴くこと、その姿をあらわすこ
とに対する関心がしだいに希薄になっていくように思われる。病因論
として鬼を見た場合、すでに体内に入りこんでいることが多く、その
鬼は気状のものとして理解された。そして気系の病因論が、その病因
論の幅をひろげるために邪気をもちだすようになると、鬼と邪気は容
易に混同されるようになってくる。そして鬼は邪気だけにとどまらず、
さらに陰陽とも結びついた。『礼記』の疏に、強い陰気に乗じて鬼が
あらわれる、とみえ、陰気と鬼がむすびつけられた。また気や陰陽は
道教の中にも入り込み、東王父や西王母といった陰陽を体現した神や
陰陽神などといった神まであらわれるようになるのである。

注

- (1) 成公十年。拙稿『神農本草経』にみえる鬼について、大阪府立大
学人文学会、「人文学論集」第11集、一九九三年、参照。
- (2) 「日書」と題された書物は、定鼎漢簡「日書」他数種類がある。こ
こでは雲夢睡虎地秦簡「日書」のみをとりあげた。
- (3) 工藤元男「睡虎地秦簡『日書』に現われた治病・鬼神関係資料をめ
ぐって」(第二回 張家山医書研究会配布資料 一九九三年一月
四日 於京大会館)。同「睡虎地秦簡『日書』における病因論と
鬼神の関係について」(『東方学』第八八輯、東方学会、一九九四年)、
同「雲夢秦簡「日書」の研究」(平成三・四年度科研費、一般研究

〔研究成果報告書〕、饒宗頤・曾憲通『雲夢秦簡日書研究』（中文
大学出版社、一九八二年）、李曉東・黃曉芬「從《日書》看秦人鬼
神觀及秦文化特徵」（《中国社会科出版社》、「歴史研究」、一九八
七年、第四期）等を参照。本章の論考は工藤氏の資料と考察に負う
ところが多い。

(4) 鬼の名前を知るといふことは、「鬼」を退治する上で重要なことだ
と考えられていた。澤田瑞穂「見鬼考」、「劾鬼」（平河出版社『中
国の呪法』、一九八四年）。平木康平「劾鬼術」、井上豊「見鬼術」
（新人物往来社『道教の大辞典』、一九九四年）参照。

(5) 王父・王母は、『爾雅』「積親」に「父之考為王父、父之妣為王母」。
『積名』「積親屬」に「祖、祚也。祚、物先也。又謂之王父。王、
咍也。家中所歸咍也。王母亦如之」とあり、祖父母をさす。咍は
「光美」、『説文』の意。『礼記』「祭統」には「孫可以為王父尸」
とあり、すでに亡くなった祖父の場合にもいふ。

(6) 『爾雅』「積親」には「父―王父―曾祖王父―高祖王父」と系列を
示す。

(7) 工藤氏は「甲乙有疾、父母為祟、得之於肉」といった記述より、
「犠牲・供進の共食によって生じた食中毒が病の直接の原因（前掲、
工藤「睡虎地秦簡『日書』における病因論と鬼神の關係について」
一〇頁）」と推測する。

(8) 揚雄の「解嘲」、『漢書』揚雄伝」に「高明之家、鬼瞰其室」とある。
瞰は師古曰「瞰、視也」で、のぞきこむこと。李奇は「鬼神害盈而
福謙也」と述べるが、鬼が家をのぞきこむことによって不幸になる
と考えられていたようだ。

(9) 父の代で、伯父・叔父をさす。前掲、工藤氏資料一〇頁、原注「1」
参照。ほかに「母葉（世）」・「外鬼兄世為實」などという表現もあ
る。

(10) 「…而ち人に非ざるなり。必ず枯骨なり。且にして之れを最（撮）
め、苞むに白茅を以てし、果（裏）みて以て賁（奔、潰では？）り、
而して之れを遠去すれば則ち止む」も枯骨という骨が関与する。鬼
の出現するときは、どこかに鬼の骨が残されているようだ。鬼（靈
魂）はその骨に依りついているのだろう。これは『莊子』至楽篇の
髑髏と莊子の問答を想起させる。この至楽篇の積文には「髑髏、枯
骨也」と記されている。骨に関しては、拙稿「尸解仙と古代の葬制
のかかりについて」（《中国研究集刊》長号、大阪大学中国学会編、
一九九三年）参照。

(11) 馬繼興『馬王堆古医書考釈』（湖南科学技术出版社、一九九二年）
『五十二病方』五十一「魃」の解題に「本篇治療小兒病魃病的医方」
とあり、そのあと数説を紹介する。『千金要方』は妊娠中の女性の
胎内に悪神が入りこむとする。また明・魯伯嗣『嬰童百問』は「子
供がまだ歩けないうちに妊娠したときに、その子が骨が立つほど、
やせ衰え、熱が出るような症状が魃病だといふ。

『後漢書』礼儀志「大難」の注に引く『漢旧儀』に「顛頊氏に三
子有り、生れて亡去し、疫鬼と為る。…善く小兒を驚す」とある。
これは生れてすぐに死んだ嬰兒が害を為す、というものである。さ
きの説とはやや観点が異なっている。ここにみえる「善く小兒を驚
す」の「驚」は「驚風」のことで、小兒の病む脳膜炎のことをいふ。
魃は死亡した小兒の鬼であるが、その引き起こす疾病を病むもの
もまた小兒であることが多かったように思われる。前掲『神農本
草経』に見える鬼について」参照。

(12) 灰は吹きかけることもある（甲種「詰」三十四）。灰をもちいるこ
とは「日書」の随所にみえる。大川俊隆氏は前掲の研究会の席上で、
鬼の足跡が灰に残るからだという解釈を示された。目に見えない鬼
の存在を灰によって確かめるのだろう。

- (13) 前掲『後漢書』禮儀志「大饗」、前掲『神農本草經』にみえる鬼について参照。
- (14) 『塩鉄論』「散不足」篇。
- (15) 前掲「尸解仙と古代の葬制のかかりについて」一、厚葬と薄葬、参照。
- (16) 工藤氏は「健常者にも鬼はしばしば見えた節がある」とする。前掲論文18頁。
- (17) 邦は国社とされる。工藤元男(甲種「詰」45)の付注参照。なお「遽鬼」は(甲種「詰」48)にもみえる。
- (18) 犬の怪異は、後漢、応劭『風俗通』「怪神」の「世間多有狗作変怪」等参照。
- (19) 大神については、「類造上帝、封大神(『周礼』春官、肆師)」の注に「…大神、社及方嶽也」とあり、社や方嶽の神をさす。
- (20) 疏は祖霊を精気という気でとらえる。
- (21) 前掲工藤論文一八頁で工藤氏は『韓非子』内儲説の「五姓(牲)の矢」で浴した例を挙げ、「予め自ら犬の糞で浴みするというのは、鬼を見てしまうことの穢れを祓除するためである」という。本来、鬼が嫌悪して逃げるように汚物や悪臭のするものを塗るのだと思われるが、それは同時に祓除の効果がある。
- (22) 『病方』釈文は「驅」と解釈するが、「殿」かもしれない。いずれにしても「饗」の儀式に通じる。
- (23) 書下し文は、前掲、赤堀昭『病方』訳注を参考にした。
- (24) 拙著、講談社現代新書『不老不死』一九九二年、一七六―八一頁「桃」参照。
- (25) 前掲『馬王堆古医書考釈』六三二頁。
- (26) 方相氏はおそらく祖霊にもとづく神であろう。
- (27) 読み方に各説がある。ここは赤堀氏の説に従った。前掲『病方』

- 一九六頁、注三五〇参照。
- (28) 前掲『病方』注五一―五五頁参照。
- (29) 拙稿「『氣』系の病因論」(大阪府立大学人文学会「人文学論集」第十三集に投稿中)参照。
- (30) 灸が完ることを一壮という。
- (31) 『傷寒論語釈』(劉渡舟主編、人民衛生出版社、一九九〇年)一九一頁に「陰易」は「陰陽易」で、男女の交接後に起る病、という。
- (32) 前掲『馬王堆古医書考釈』四四二頁に『千金翼方』卷二十一「霍乱」の治療に「童女月経衣」を用い、また『本草拾遺』に血が湧き出る刀傷に「月経衣」を用いることを紹介する。『本草拾遺』については、血によって出血をとめるという解釈が成り立つが、馬王堆のものにはあてはまらない。なお馬繼興氏は「月経衣」を用いる理由については述べていない。豚の糞などで悪臭を追い出すのと同様、穢れたもので悪臭を追いはらうのかも知れないが童女の月経衣には当てはまらない。おそらく血に対する信仰も混在しているのだろう。
- (33) 『病方』では精液を薬としてつけることはあるが男子の禪を用いる例はない。
- (34) 前掲『不老不死』二三―六頁参照。
- (35) 前掲『諸病源候論校注』六九頁、注二〇参照。
- (36) 『外台秘要』卷二八「中惡方」では「鬼邪之氣」につくる。
- (37) 『諸病源候論校注』は、この部分につきのような注釈を施す。「鬼厲惡鬼。《左伝》成公十年…「晋候夢大厲」、注…「厲、鬼也。《広韻》…「厲、惡也」。
- (38) 『諸病源候論校注』は「夢魘。夢中遇可怕之事而呻吟、驚叫」という注釈を施し、鬼のことは全く言及しない。
- (39) 『老子』五十五章に「赤子…骨弱筋柔而握固」とある。
- (40) 『養生延命録』は「按経云、拘魂門、制魄戸、名曰握固、与魂魄安

門戸也。此固精明目、留年還魂之法。若能終日握之、邪氣百毒不得入」という。魔のことはみえず、「鬼」ではなく「邪氣」という言葉がみえる。

(41) 気が絶えると死ぬというのは、気に関する考え方の最も原初的なものを示しているように思われる。

(42) 『聖濟総録』は「停住」を「不已」につくる。

(43) 『隋書』孤独陀伝に、猫鬼に事える話が見える。

(44) 『諸病源候論校注』の注釈は「精神明爽。在此猶言精神。或謂魂魄……《左伝》昭公二十五年・「心之精爽、是謂魂魄」、という。ここでも精爽は精神・魂魄の意味であらう。

(45) 前掲『神農本草経』にみえる鬼について「八六頁参照。

(46) 本稿では、疫鬼をはらう儀式である「攤」や道教系医学の書『千金翼方』などを考察する予定であったが、紙数の関係で果たせなかった。病をおこす悪鬼とそれを調伏する善神という基本原理のもとに、宗教系の医学は成り立っていく。それらについてはいずれ機会をあらためて考察したい。

※本稿は平成五・六年度、文部省科学研究費補助金、一般研究B「新出土資料による中国医学の研究」の助成による研究成果の一部である。